提案日　2019.05.15

研　究　概　要

研究主題　小中連携による、主体的に学び、考え、表現する児童生徒の育成

～　言語活動の工夫を通して　～

１．研究を始めるにあたって

本校は、学級数９クラス（各学年２クラスと特別支援学級３クラス）で、全校生徒 165 名の小規模校である。校区内には小学校が１校ある。

生徒信条「やればできる・磨けば光る・一歩でも前進」の下、生徒は素直に学校生活を送っており、その素直さは学習面にも生きている。授業や他者の考えなどから学び取ろうという素直な姿勢をもつ生徒が多いことから、全国学力・学習状況調査や佐賀県小・中学校学習状況調査で少しずつ結果が出てきている。

生徒たちは、より確かな学力を育成することを目指して、小学校では、多くの教科・領域において児童たち同士が教え合い学び合う「協働学習」を計画的に取り入れた授業を受けてきた。学習過程の中には「学び合いタイム」が位置付けられており、電子黒板やタブレット端末を用いて発表したり、話し合ったりしてきた。佐賀県小・中学校学習状況調査児童生徒意識調査（平成 30 年度 4 月調査、1 年生）では、「授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていると思う」「授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていると思う」生徒の割合は非常に高い。

そのような中、本校は、平成 30・31 年度と、佐賀県教育委員会から「児童生徒の活用力向上研究」の指定を受けた。

２．本校の現状と課題

佐賀県小・中学校学習状況調査児童生徒意識調査（平成 31 年 4 月調査・２年生）の結果を分析して、小学校では意識が高かったにもかかわらず、本校の生徒は、友だちの意見を聞くことの良さは実感しているが、自分の考えなどを人に伝えることは苦手としていることが明らかになった。では、本校の教職員の意識はどうだろうか。県の児童生徒意識調査の項目に合わせて、次のようなアンケート調査を行った（表１）。

表１　言語活動の指導に関する本校職員の実際や意識　　平成 31 年 4 月 10 日実施

調査人数 16 人 質 問 項 目	そう思う	**どちらかといえばそう思う**	**どちらかといえばそう思わない**	そう思わない
①授業では、自分の考えを発表する機会を生徒に与えている。	３人	**１１人**	**２人**	０人
②授業では、生徒の間で話し合う活動をよくさせている。	３人	**１０人**	**３人**	０人
③学校の授業などで、生徒は、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思っている。	４人	**１１人**	**１人**	０人
④生徒の間で話し合う活動を通じて、生徒は、自分の考えを深めたり広げたりすることができている。	１人	**１１人**	**４人**	０人

16 人中 15 人の教職員が「③学校の授業などで、生徒は、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思っている」と考えているので、14 人の教職員は「①授業では、自分の考

えを発表する機会を生徒に与えている」。また、「④生徒の間で話し合う活動を通じて、生徒は、自分の考えを深めたり広げたりすることができている」については、12 人がそう思っている。話し合う活動に意義を認めているので、13 人の教職員が「②授業では、生徒の間で話し合う活動をよくさせている」。

しかし、どの項目も「どちらかといえばそう思う」に回答が集中している。このことは、言語活動の指導に対して本校教職員の意識があいまいであることを表している。これは、本校の教職員が発表させたり話し合わせたりするといった表現の指導に課題をもっていることに原因がある。

３．研究仮説

『学習指導要領』の総則には、「生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること。」と明記されている。

では、その振り返る活動には、どのような意義があるのか。主体的な学びのあり方について研究するアメリカの教育研究者ロスステインらは、「振り返りは生徒たちに、自分たちが学んできたことを自分の言葉で語るチャンスを提供します。それを行ったときに初めて、彼らは学んだスキルを自分のものにすることができ、自分が学んだことを異なる状況で使いこなせるだけの理解も深まるのです。（『たった一つを変えるだけ－クラスも教師も自立する「質問づくり」－』／ダン・ロスステイン、ルース・サンタナ 著／吉田新一郎 訳／新評論 発行／P217）」と述べている。

次に、見通すことについては、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校が、『「見通す・振り返る」学習活動を重視した授業』で、以下のように述べている。

> 学習の結果を見通すとは、生徒が到達すべきゴールを見据え、イメージすること。結果を見通すことにより、目標の具体が見えたり、生徒の知的好奇心を刺激したりすることができるので、生徒が学習活動に対する『考えたい』、『表現したい』という学習意欲を喚起することができる。
>
> 学習の過程を見通すとは、生徒がゴールに到達するための手順を把握したり、方法や手立てを考えたりすること。過程の見通しを立てさせることにより、生徒はどのような流れでゴールへ到達していけばよいのかが具体的に見えるため、生徒の学習意欲がいっそう具体的になり、持続させることができる。また、ゴールに到達するための方法や手立てを自分なりに考えたり他者と共同で考えたりする機会が得られるので、思考・判断・表現を具体的に行動として進めることができる。

また、家庭学習についても、『中学校学習指導要領解説』には「生徒が家庭において学習の見通しを立てて予習をしたり学習した内容を振り返って復習したりする習慣の確立などを図ることが重要である。これらの指導を通じ、生徒の学習意欲が向上するとともに、生徒が学習している事項について、事前に見通しを立てたり、事後に振り返ったりすることで学習内容の確実な定着が図られ、各教科等で目指す資質・能力の育成にも資するものと考えられる。」と明記されている。振り返る・見通すことをより重視した家庭学習の工夫によって、学校と家庭での学習に連続性をもたせることは、学力の向上につながると考える。

このように、振り返る・見通す活動を学習指導に位置づけていけば、生徒の学習意欲は高まり、苦手としている表現力の育成もできると考える。しかし、以下の「授業づくりアンケート」（一部）の結果から、授業の中で全ての教職員が振り返りを行っているわけではないことが明らかになった（表２）。

表２　振り返りの実施の有無　　**平成 31 年 4 月 10 日実施**

調査人数 16 人 質 問 項 目	はい	いいえ
⑧授業の最後に「振り返り」を行っていますか。	１３人	３人
⑨授業のはじめに「振り返り」を行っていますか。	１４人	２人

振り返る・見通す活動は、生徒の「表現」を用いた活動の一つであるが、本校の教職員は生徒による「表現」や「言語活動」の実施に苦手意識をもっているといえる。そのため、自分の考えを発表する活動が小学校と比べて中学校の授業ではあまり行われなかった。その結果、生徒にも表現面での苦手意識

をもたせてしまっている。本校の実態に合わせて、研究主題を「小中連携による、主体的に学び、考え、表現する児童生徒の育成～言語活動の工夫を通して～」、また、「活用力」を「既習の知識や身につけた技能等を活用して、自分の考えをもち、相手に伝えたり表現したりする力、それを自分で評価し改善する力」とする。そして、その活用する場面は、教科を横断し、義務教育９年間を縦断すると考えている。

４．研究の方法

この研究主題の下で授業改善を進めていくにあたり、特に授業の導入の段階に着目した。生徒を導入の段階で学習過程に能動的に関与させることで、少しでも早く主体的な学びへと誘って行くためである。そこで、次のような「北方中授業スタイル」を設定した。

「　北方中授業スタイル　」

○ 授業を振り返りから始め、それを生徒が説明する授業

○ 話し合う目的が明確であり、話し合い活動が活性化している授業

「北方中授業スタイル」を取り入れた授業の流れ

過　程	学　習　活　動	
導　入	振り返る１ 見通す１	○ 既習の学習を振り返る。 ○ 本時の学習を見通す。 ・ 今日の「めあて」なら「まとめ」はどうなるか予想を出し合う。
展　開	話し合う まとめる	○ 教師の例示にまなびながら話し合う。 ○ 「めあて」に対する「まとめ」を書かせる。 ① めあて　② 内容　③ 方法・活動　④ 結果　⑤ まとめと展望
結　び	振り返る２ 見通す２	○ 本時の学習を振り返る。 ・ 最初の予想は正しかったか、どこが間違っていたか振り返る。 ○ 次時の学習を見通す。

振り返りとまとめの例

	めあて	内容	方法・活動	結果	まとめと展望
A	T	T	T	T	T
B	T	S	S	S	T
C	S	T	T	T	S
D	T	T	T	S	S
E	S	S	S	T	T
F	S	S	S	S	S

Ｔ…教師　　Ｓ…生徒

５．本年度の研究

○ 「北方中授業スタイル」を取り入れた授業を行い、互いの授業記録を交換する。

○ 客観的資料（授業記録）のもとに授業研究会を行う。

６．研究の組織

各学年職員がまんべんなく各部会に所属して、各部会で話し合ったことを各学年会で報告できる（そ

の逆もできる）ようにする。

研究推進委員会　（７名）
（校長、教頭、教務、研究主任、各部会長、学力向上対策コーディネーター）

２校研究推進委員会
（教頭、教務、研究主任）

全体研究会

◎…部会長

学年	授業づくり部会（５名）	学習環境部会（６名）	家庭学習部会（６名）
１年	円城寺（数学）	◎小野（英語）、梶原（技術科） 松浦（英語）	神近（国語）
２年	◎永石（美術）、堤（社会）	林（音楽）	◎渡邊（英語科）、西山（保体）
３年	渡邊（国語）、穴澤（家庭）	中嶋（理科）	中尾（社会）、山田（数学）
級外		松尾（養護教諭）	石山（理科）

７．各部の活動内容

(1) 授業づくり部会

① 「北方中授業スタイル」改善の推進

【 話し合い活動を活性化させるポイント 】

・グループの中に一人は話しやすいメンバーがいるように、メンバー構成に配慮する。教師が司会者のモデルを示す。

・授業のめあてに迫る課題（話し合いのテーマ）を複数用意して生徒に選ばせる。課題は「開いた問い」になるようにする。また、経験などによる違いが出るようにする。例えば、「主人公以外で重要な登場人物はだれですか。」→「どうしてその人物が重要だと思うのですか。」

「脇役がいる意味は何ですか。」「実験の計画は適切でしたか。」→「次に同じ実験をするとしたら、今度はどのように工夫しますか。」

・複雑な話線をつくるように手立てをとる。例えば、口火を切った人の意見に対して意見を述べさせる。質問をしたり自分の考えと比べて共通点や相違点を述べたりしながら進めさせる。

・ 話し合った結果自分の考えがどう変わったか、考えが変わらなかった場合は今の考えやなぜ変わらなかったかなどについて発表させ、書かせる。

・ クラス全体に、誰が、何を、どのように発表するか決めさせる。

・ 発表終了後は学習者個々に返す。例えば、

「これで各班の意見が出揃ったが、比べてみてどうか。」などと尋ねてみるのもよい。比べる際は、教師が例を示す。

② 中１の活用力育成

県の学習状況調査を見てみると１年生の活用力が低い。小学校で学習したことを中学校の学習に活用できていないことも考えられる。

小学校と中学校の違い　（例）

	小学校	中学校
漢字ノート	１２０字	１５０字
自主学習	毎日、課題を選択、見開き２ページ	定期テスト前２週間、自由、１ページ以上
夏休みの課題	前半課題、後半課題	全てまとめて

③ 授業についてのアンケート調査からその変容を見て、それを授業改善に活かす

○ 本校職員：2018 年５月、2019 年２月、2019 年４月、2020 年１月
本校生徒：2019 年４月、2020 年１月

(2) 学習環境部会

【学習環境の整備】

① 主に授業に関係すること
- めあてとまとめの提示
- 授業の始まりと終わりの挨拶の仕方の統一
- 話し方や聞き方の統一

② 主に校内環境整備に関すること
- 掲示物の中身の工夫と貼る場所の検討
- 特別支援学級の生徒も読めるように掲示物を工夫する。

③ 主に家庭学習環境に関すること
- タイムマネジメントの指導
- 健康などに関する学習の計画
- ＳＮＳに関する学習の計画

(3) 家庭学習部会

① 家庭学習の仕方の指導

家庭学習にも見通しをもたせる。例えば、時間よりもこれだけしたら終わりといった内容についてがよい。

例１　最初の１問に学校で取り組み、残りは家庭で取り組む。

例２　今日の家庭学習で取り組むことを帰りの会で５分間行ってから続きは家庭学習で取り組む。

② 自主学習ノートなどの提出された宿題の取り扱い方の工夫

モチベーションを高めることが大切である。出しっぱなしはいけない。

③ ＩＣＴ機器の利活用の工夫

スタディ・サプリの効果的な使い方を考え、提案する。

８．年間計画

◇…授業研究会、◆…各部会

月	案内	内　　容	北方小	備　　考
4		○全体計画・年間計画の作成 ○研究推進体制の整備 ４／　５（金）研究推進委員会① ４／１０（水）校内研究会①（◆） ４／２６（金）２校研究推進委員会① １６：００　小学校		４／１５事業説明会
5	無	５／１５（水）校内研究会②（◇◆） 国語科：渡邊（３年）、神近（１年）		５／ 研究計画書提出
6	有	**６／１９（水）公開授業①** （校内研究会③）（◇） 理科：中嶋（３年）、数学：山田（３年）	6/26 研究授業	講師 竜田　徹先生（佐賀大学）
7	無	７／１７（水）校内研究会④（◇◆） 英語：小野（　年）、技術：梶原（　年） 社会：　堤（　年）		
8		８／２１（水）研究推進委員会② ８／２１（水）校内研究会⑤（◆）		８／７（予定） 指定校連絡会
9	有	**９／２５（水）公開授業②** （校内研究会⑥）（◇） 美術：永石（　年）、理科：石山（　年）		講師 竜田　徹先生（佐賀大学）
10	有	**１０／２３（水）公開授業③** （校内研究会⑦）（◇） 保体：西山（　年）、数学：円城寺（　年）	10/30 研究授業	講師 竜田　徹先生（佐賀大学）
11	有	**１１／２１（木）公開授業④** （校内研究会⑧）（◇） 英語：渡邊（　年）、家庭：穴澤（　年）		講師 竜田　徹先生（佐賀大学）
12	無	１２／１１（水）校内研究会⑨　（◇◆） 音楽：林（　年）、社会：中尾（　年）	12/12 公開授業	
1	無	１／２９（水）校内研究会⑩（◇◆） 英語：松浦（１年）		
2		２／１９（水）研究推進委員会③ ○２校研究推進委員会②		２／７（予定） 指定校連絡会
3		○研究成果についての検討（成果と課題） ○次年度の取組の計画 ３／１０（火）校内研究会⑪		３／　　報告書提出

※ 先進校視察…「活用力」２年目の学校を中心に

○ 附属中学校　第１回活用力向上公開授業研究会（６／３締め切り）　６／１４（金）14:00

小・中学校教育研究発表会　小学校１１／１４（木）

中学校１１／１５（金）

○ 附属小学校　授業力向上フェスタ 2019　７／２３（火）

○ 伊万里中学校　　○ 南波多郷学館　　○ 西部中学校

９．１年目の状況

「言語活動の指導に関する本校職員の実際や意識」の①「授業では、自分の考えを発表する機会を生徒に与えている。」と考える教師の数が 12 人から 15 人に増え、③「学校の授業などで、生徒は、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思っている。」と考える教師の数が 12 人と 5 人も減った。また、②「授業では、生徒の間で話し合う活動をよくさせている。」と考える教師の数が 11 人と 1 人減っているが、④「生徒の間で話し合う活動を通じて、生徒は、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。」と考える教師の数が 15 人と 2 人増えていることから、本校職員の話し合い活動への意識が高まり、しっかりと考えて話し合い活動を授業に取り入れていること、発表させたり話し合わせたりするといった表現の指導における課題を克服する方向に向かっていることが考えられる。

しかし、どの項目も「どちらかといえばそう思う」に回答が集中しており、言語活動の指導に対して本校教職員の意識がまだまだあいまいであることを表している。次年度は、職員も入れ替わるので、更に意識改革を進めなければならない。

言語活動の指導に関する本校職員の実際や意識

H30　４月　調査人数 17 人、H31　２月　調査人数 16 人 「（あ）そう思う」「（い）どちらかといえばそう思う」職員の数	H30　４月		H31　２月	
	あ	い	あ	い
① 授業では、自分の考えを発表する機会を生徒に与えている	０人	12 人	4 人	11 人
② 授業では、生徒の間で話し合う活動をよくさせている。	2 人	10 人	5 人	6 人
③ 学校の授業などで、生徒は、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思っている。	7 人	10 人	4 人	8 人
④ 生徒の間で話し合う活動を通じて、生徒は、自分の考えを深めたり広げたりすることができている。	2 人	11 人	1 人	14 人

次に、「北方中授業スタイル」の実施状況を見てみると、①授業を「振り返り」から始めていない職員は３人と減っている。また、③授業の最後に「振り返り」を行っていない職員は１人と減っている。「振り返り」への職員の意識が高まってきていると考えられる。

「北方中授業スタイル」の実施状況

H30　５月　調査人数 18 人 H31　２月　調査人数 16 人	H30　５月		H31　２月	
	はい	いいえ	はい	いいえ
① 授業を「振り返り」から始めている。	14 人	4 人	13 人	3 人
② 授業の最後に「振り返り」を行っている。	13 人	5 人	15 人	1 人

「言語活動の指導に関する本校職員の実際や意識」の②「そう思わない」という職員 5 人の理由は、

ア. 毎時間取りたいと思っているが、話し合いが深まらず毎日ではマンネリ化してしまうから。

イ. 理科では、実験を行うことに時間がかかり、結果を話し合う時間を確保できないから。

ウ. 美術では、作品制作の場面では個人作業になりがちだから。鑑賞の単元では、話し合い活動を取り入れている。

エ. 音楽では、実技を伴う訓練的な内容が多いので、話し合う時間というのはとても特殊な時間になってしまうから。鑑賞などの内容の時に取り入れたいと考えているので、全体の時間に対する割合は少ないと思う。

オ. 準備不足によるもので、私自身の努力が足りないから。

カ. まだ「話し合う」というよりは、「確認し合う」のレベルだから。（若手職員から）

と、時間的なことと話し合いのさせ方などがあげられている。「話し合い」活動は「必ず５分入れる」と決めて行い、マンネリ化に負けないことを呼びかけていきたいと思う。